



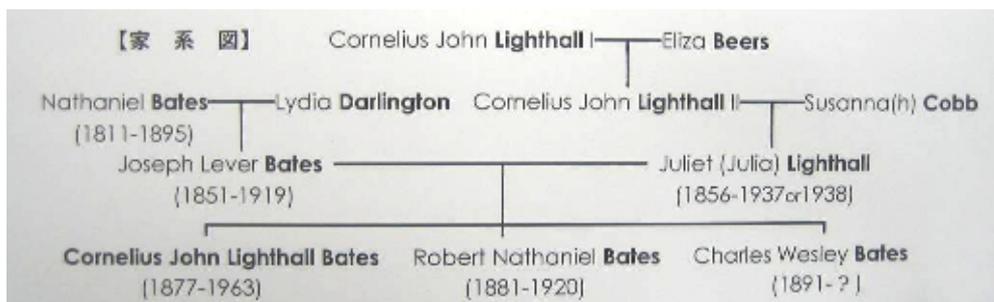
故郷ロリニャルの C. J. L. ベーツ

池田裕子

121年の歴史を有する関西学院には、現院長を含め15人の院長（アメリカ人3人、カナダ人2人、日本人10人）が登場します。その中で名前を目にする機会が多いのは、創立者ランバス(W. R. Lambuth)と現職を除けば、第4代院長を務めたカナダ人宣教師 C. J. L. ベーツであることに異論はないでしょう。しかし、その名をフルネームで言える人は、ほとんどいないのではないのでしょうか。C. J. L. と通常イニシャルで書かれている部分を含め全て書くと、コーネリアス・ジョン・ライトホール・ベーツ (Cornelius John Lighthall Bates) となります。家族や親しい友人からはジョンと呼ばれていました。戦前の学生は、宣教師館を訪ねた時、ベーツ夫人が「ジョン、ジョン」と言うのを聞いて、犬でも呼んでいるのかと思っていたらベーツ先生のことだったと書いています。その「ジョン」の関西学院への赴任は、今からちょうど百年前の1910年9月でした。この機会に、これまであまり語られることのなかったジョンの故郷と家族の話を紹介しておきましょう。

まず、コーネリアス・ジョン・ライトホールという立派な名前ですが、これは母方の祖父と曾祖父の名です（後年、ジョンは次男に自分と同じ名をつけました）。コーネリアス・ジョン・ライトホール1世（曾祖父）は、19世紀はじめにアメリカからカナダにやって来て、オンタリオ州東部に位置するプレスコット郡(Prescott County)ヴァンクリーク・ヒル(Vankleek Hill)の南に農場を購入しました。その農場で生まれ育ったコーネリアス・ジョン・ライトホール2世（祖父）は、結婚後アメリカのウィスコンシン州に移住しましたが、南北戦争を機にカナダに戻り、今度は家族を置いて、単身オーストラリアに渡りました。当時のオーストラリアはゴールドラッシュに湧いていたのです。しかし、一財産を築くことなく帰国し、ブレダルベイン(Breadalbane)に落ち着きました。2世の子どもの内、2人の息子と6人の娘が成人しました。娘の一人ジュリエット(Juliet)が、ジョゼフ・レヴァー・ベーツ(Joseph Lever Bates)と結ばれ、生まれた子がジョンというわけです。

家族や仲間からレヴァーと呼ばれていたジョゼフ・レヴァー・ベーツは、1827年にアイルランドのウェックスフォード(Wexford)からカナダに移住したナサニエル・ベーツ(Nathaniel Bates)の4男です。兄弟と共に16歳でカナダにやって来たナサニエルは、最初、オンタリオ州プレスコット郡のジョージ・レイク(George's Lake)近くに落ち着きましたが、やがてグレンヴィル郡(Grenville County)スミス・フォールズ(Smiths Falls)そばのイーストonz・コーナズ(Eastons Corners)に移りました。レヴァーは、1851年にそこで生まれたのです。農場育ちにもにかかわらず、ビジネスに関心を持ったレヴァーは、大理石とみかげ石を扱うフルフォード社(Fulford Co.)に入って修行を積みました。25歳の時、ジェームズ・フルフォード(James Fulford)と組んで、プレスコット郡ロリニャル(L'Orignal)で商売をはじめます（パートナーが手を引いたのちもレヴァーは商売を続け、1912年の引退後はオタワに居を移しました）。そこでジュリエットと出会い、結ばれたのです（その後、レヴァーの兄はジュリエットの妹と結婚しました）。



2人の結婚は1876年でした。翌年5月26日にジョンが生まれました。4年後にロバート(Robert)、14年後にチャールズ(Charles)が誕生しましたから、ジョンは3人兄弟の長男ということになります。ここで、ジョンとは異なる道を歩んだ2人の弟について簡単に触れておきましょう。

ロバートは父親からビジネスの才能を受け継いだようです。紙パルプの会社を興し、成功をおさめました。モンリオール、ニューヨーク、ロンドンに支店を持ち活躍していたのですが、若くして悲劇的な死を遂げました。1920年、ロバートの訃報を受けたジョンは、日本からカナダに駆けつけています。そして、悲嘆にくれる母親を日本に呼び寄せ、数年間一緒に暮らしました。

下の弟チャールズもビジネスの世界に進みましたが、1929年の大恐慌で仕事を失ってからはカリフォルニアに移住しました。ジョンは何故か(考えられる理由はあるのですが)この弟には冷たく、自分から連絡を取ることはなかったと聞いています。

ところで、ジョンのその後の人生を考えた時、少年時代を過ごしたロリニャルという村、そして、2人の祖父から受けたであろう影響の大きさが偲ばれます。そこで、ジョンの祖父についてもう少し紹介しておきましょう。



【祖父ナサニエル】

ジョンの2人の祖父は対照的な性格の人物だったようです。後年、教え子たちが書いたものを読むと、興味深いことに、この孫は両方の良い点を受け継いだように思われます。まず、父方の祖父ナサニエルは厳格なピューリタンで、ダンスとカード遊びを地獄への入り口と考えていました。サーカスに誘われても、「そんな所に行くぐらいなら、豆腐の角に頭をぶつけて死んだ方がマシ」と答えるような人物でした。60年以上にわたってメソヂスト教会で奉仕を続けた熱心な説教者で、地域のキリスト教界に大きな影響力を持っていました。5人の息子はいずれも堂々たる体格の持ち主で、身長180センチ以上、体重も100

一方、母方の祖父の生涯は冒険に満ちていました。それは、金鉱を求めてオーストラリアに渡ったことから想像できるでしょう。旅行好きで、普通の人より多くの世界を見ていました。人並み外れて親切で機転が利くその人間性は、どこに行っても周囲の人々を魅了しました。朗らかな性格は子どもや孫たちからも慕われました。「2人の祖父は、敬愛の念を抱くにふさわしい人物だった」とジョンは語っています。「ベーツお祖父ちゃんは、私の知る限り、イーストンズ・コーナーズの周辺から一步も出ることはなかった。ところが、ライトホールお祖父ちゃんときたら、長く1ヶ所に留まることは困難だった」。

次に、ジョンが生まれ育ったロリニャルという村について考えてみましょう。その名が示すとおり、この小さな村はオンタリオ州の中のフランス語圏にありました(ロリニャルはフランス語でムース<ヘラジカ>の意味)。オタワ川の南岸に位置し、オタワとモンリオールのちょうど中間地点に当たります(オタワから東に83キロ、モンリオールから西に87キロ)。古い歴史のある村で、1821年に建てられた裁判所は、オンタリオ州最古の現存する裁判所だそうです。村の人口千人の内、3/4はフランス系でした。ジョンは、フランス語圏の中で英語を話すマイノリティとして育ったのです。

ロリニャルには鉄道の駅はありませんでした。最寄駅に出るには、川幅2.5キロほどのオタワ



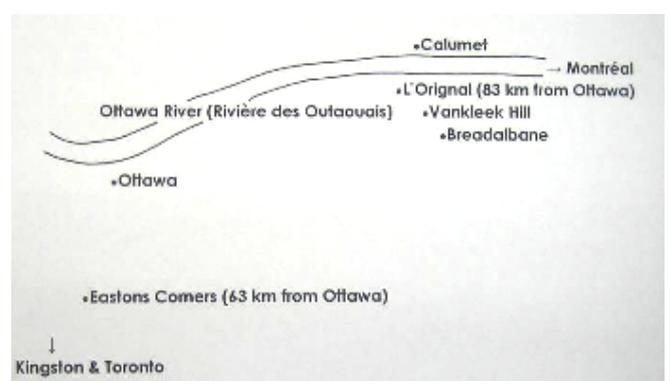
【母ジュリエット-1924年-】

川を船で横断するのが最も簡単な方法で、南岸のロリニャルから北岸のカルメ(Calumet)までボニート丸が結んでいました。一昔前の男の子だったら（今でも、あるいは女の子でもそうかもしれませんが）電車の運転士や車掌に憧れた経験があるでしょう。ジョンにとって、それはこの小さな船の船長と機関士だったのではないのでしょうか。2人はフレンチ・カナディアンでした。中でも、ナポレオンを尊敬するこの機関士は特別な存在で、フランス語と英語のちゃんぽんで色々なことを話し合うのがジョンには何よりの楽しみでした。のちに、ボニート丸よりはるかに大きな船で、オタワ川とは比べものにならないほど広大な太平洋を自分自身が7往復半（シベリア鉄道を使い、ヨーロッパ経由で日本からカナダに帰国したことがあるため、8往復にはなりません。最後に飛行機で横断したのを含めると、太平洋を8往復半したことになります）もすることになるとは、少年時代のジョンには思いもよらぬことでした。

ロリニャルを含め、これまでに登場した主な地名を地図で確認しておきましょう。



【カナダ東部】 東洋英和女学院『カナダ婦人宣教師物語』より



【オンタリオ州ロリニャル周辺】

学校教育を受けるに当たっても、ジョンはマイノリティの立場にありました。つまり、教師にフレンチ・カナディアンを雇い入れ、フランス語で授業しようということになったのです。それは、英語を母語とする住民には受け入れがたいことでした。結局、オンタリオ州教育局の指導の下、英語で授業を行うプロテスタントの学校が再建されることになりました。再建と言っても、フランス語学校の校舎の一部を使わせてもらい、校庭も隣り合わせという小さな学校です。学年の区別もなく、ABCから高校入試までをたった一人の教師が担当しました。ロリニャルでジョンが通ったのはそんな学校でした。この学校での経験が、“Live and let live.”（「自分を生き、他をも生かすめよ」「持ちつ持たれつ」）という諺の生き方を自分に教えてくれたと、後年、ジョンは息子に語りました。

ジョンの書いた長文のフランス語は目にすることがありませんが、写真の説明等、フランス語で書かれた短いメモはしばしば見受けられます。孫のチャールズ・デメストラルさん(Dr. Charles de Mestral)によると、それは全く自然なフランス語だそうです。ジョンにとって、フランス語は学校で学んだ外国語ではなく、故郷の暮らしの中で自然に身についた言葉だったのでしょうか。

村には、大きなカトリック教会と3つの小さなプロテスタント教会がありました。ジョンが、日曜の朝は長老派、午後は英国国教会、夕方はメソヂスト教会に通っていたことは、広報誌『K. G. TODAY』252号（2009年6月）で紹介しました。この3つの異なる教会での祈り、礼拝、賛美の経験が、自分のライフワークの原点だったと晩年のジョンは振り返っています。

村人たちは、自分の文化と言葉と教会こそが一番だと信じていました。と同時に、寛容な精神と善意と互いを敬う気持ちにより、様々な問題を友好的に解決する術を身につけていました。で

すから、ジョンたちが小さなメソヂスト教会を建てた時、カトリックの神父からさえも援助を受けることができたのです。教会の女性が献金を求めに行くと、ベルベ神父(Father Berube)は優しく笑いながらこう言って4ドルを差し出しました。「プロテスタントの教会を建てるのに差し上げられるものは何もないけれど、敷地内の古い建物を取り壊せば何かお渡しできるでしょう」。

ロリニヤル時代のジョンを語る上で忘れてはならないのが、運命の女性との出会いです。1889年6月(ちょうど関西学院創立のためランバスが神戸で奔走していた頃)のある朝、新しく赴任してくる牧師とその家族を迎えるため、12歳のジョンは父親と共に棧橋に向かいました。牧師の名はウィリアム・フィルプ(William Philp)、家族の他に馬と牛と猫を連れていました。この牧師の娘ハティ(Hattie <Harriet Edna>)が、のちにジョンの生涯の伴侶となって、関西学院で学生から「かかあベーツ」と呼ばれることになるのです。2人は初恋を交わしたと言えるでしょう。朝6時に到着したフィルプ一家は、ベーツ家で朝食を共にしました。

ジョンとハティはヴァンクリーク・ヒルの高校で学びました。ヴァンクリーク・ヒルは、地元では単に「ヒル」と呼ばれていました。ジョンはヒルのツイード(Tweed)夫人の所に下宿し、金曜日の授業が終わると家に戻り、月曜の朝、父親に馬車で送ってもらっていました(約11キロのドライブでした)。父親は、1時間に14キロも走る素晴らしい馬を持っていたのです。

ある時、リチャードソン・ケリー(Richardson Kelly)というメソヂスト教会の牧師が日曜の夕拝のためロリニヤルに来て、ベーツ家に泊まりました。翌朝、ケリー牧師はジョンを学校まで送ってくれました。道中「君はキリスト教徒ですか？」と尋ねられたジョンは「はい、そうあろうと努めています」と答えました。すると、ケリー牧師はこう言ったのです。「それは努力すべきことじゃない。信じることだよ」。牧師の言葉はジョンの身体を貫きました。「私はその一瞬を忘れたことがない」「啓示を受けた瞬間だった」と後年、ジョンは書いています。「キリスト教徒として生きることは、泳ぎを覚えることに似ている。水に浮かぶことを覚えればいい。信じてルールに従えば、簡単なことだ」。15歳のジョンはそう悟ったのでした。



【ロリニヤル時代のジョン(左)-1880年頃-】

当時は、3~4歳まで服装に男女の区別がなかったため、ジョンも女の子のように見えます。

チャールズ・デメストラルさん所蔵。

チャールズさんはお祖父様の少年時代の写真(銀板写真?)を他にもお持ちです。

〈主な参考文献〉

Bates Diaries, 1935-1942.

C. J. L. Bates, "These Sixty Years in the Ministry," 『関西学院七十年史』1959年.

Robert Bates, *Newcomers in a New Land*, 1988.

Letter of April 6, 1920, from C. J. L. Bates to Dr. Endicott (courtesy: UCC Archives).

Letter of Nov. 13, 1956, from C. J. L. Bates to Armand de Mestral (courtesy: Armand de Mestral).

Historical Atlas of Canada, vol. 2, 1800-1891, Univ. of Toronto Press, 1993.

The Times Atlas of the World, 1999.

McClelland & Stewart, *The Canadian Encyclopedia*, 2000.

*5頁の写真は、アルマン・デメストラルさん(Dr. Armand de Mestral)所蔵のベーツ・アルバムより拝借しました。

ベーツ先生来学百周年を記念し、広報誌『K. G. TODAY』6月号では巻頭特集が組まれます。また、同誌裏表紙にて連載中の「学院探訪」でも6月号からカナダやベーツ先生のことを連続して紹介します。ご注目ください。